

洋畫談

東京美術學校教授 黒田清輝君談

◎博覽會の洋畫ですか。私の見た所では、案外でした、と言ふのは、第一に出品點數が至つて少い。第二に立派な畫が稀少であることです。特に洋畫界の各家の作と云ふのが、非常に少いのは遺憾でした。洋畫界の中心となる所は、今日では無論東京であるが、其の東京の人々が、一向氣乗りがしなかつたのは事實のやうです。氣乗りがしないから、従つて出品も少くて、見渡す限り第二流以下の作家が多くなつたのです。私なども彼地あちらに行つて、始めて博覽會が開けると言ふ景氣を見たので、これならば何か出品したらば宜しかつたと後悔した位です。恐らくは他の東京の人々も、同じ感を感じたことでありませう。

◎新聞で御存知の通り、鑑査出願の數が百十二點で、及第したのが僅に四十七點でした。此の前の博覽會の時にも、出品許可を得たのは此の位であつたと覺へて居ますが、前と比較しては、甚だ小數であると言はねばなりません。すまい。

◎無論前回よりも進歩して居りますが、概評すれば幼稚の譏は免れまいと思ひます。早い話が、何か新しい研究を始めて居るやうな跡は毫も認めるとが出来ぬ。只まあ塗りさへしたならば、油繪が出来ると心得て居るらしいのです。

◎ 繪をかくのは、只塗れば出来るものではない事は明白な事であるが、多くは無意義に遣つて居るやうです。目的なしに繪が出来る筈がない。如何に無意義のもので、結果から見れば、何か意義が現れて居るやうなもので、畫家たるものが、漫然刷毛を持つたからとて、決して繪らしい繪が出来るものではありませぬ。全しく自然の風景に對しても、何ういふ所、或は如何様な趣を、表現しやうといふ考が無かつたならば、恰も文章を作る時に、出たら目に文字を列べたと同じ拙劣醜陋な結果が生ずるのであらうと思ふ。

◎ 日本の洋畫が、概して色彩がばらばらになつて居ると言ふのは、洵に見悪い缺點であります。吾々が風景に接する場合には、決して箇々獨立の山川草木を見ない。然るに油繪中には、彼處には木、此處には草、或は花といふやうに、種々の物が、箱細工的はめざいくてきに配列されてある。即ち色彩が一昧として融和されて莫い。自然界の物が、吾々の眼に映ずる場合には一昧として、調和あるものとして存在するのは、瞭かなことで、此の點を示すのが、油繪の妙處であります。

◎ 兎角日本の油繪の顔料は離れ易い。これは東洋の空氣の具合にも由ることでありませうが、他の一原因は、幼少の折から日本畫を見馴れて居るとであらうと思ひます。日本畫を通じて風景を見る。言ひ換へれば、山水を見ても日本畫化する習慣が、依然として傳はつて居るからであります。

◎ 佛蘭西の所謂印象派といふのが、此の要點、即ち一致調和ある感を現し出さうと勉めた一派です。勿論後には弊も生じましたが、其の精神は決して悪くない。私の師としたコラン氏は、實に穩健な考を持つて居られたので、今日の印象派の如く極端に走らず、さりとて舊派のやうに、實際の感を棄てるやうの事もないので、これは至

極穩當の考であらうと思ひます。故にコラン氏は眞正の印象派であると申しても宜しい。が、今日印象派と稱する人々とは、大に異なる所があるのです。

◎英吉利の畫界では、依然として中古を慕ふ風があるやうに見受けます。これはラファエル前派の影響でありませう。御存知の通り此の一派はラファエル以前の、發達しない繪を模倣したのです。發達しないと云ふても、其の不完全な形の裡には言ふに言はれぬ味がある。古畫の妙味、之れは一種特別の意義を有して居るので、骨董的嗜好と言へば其れ迄ですが、實際面白い所がある。是れを模倣したのがロゼツチーの一派で、隨分影響も廣いのです。今日のヌーボー式なども、其の影響を受けて居るのです。

◎佛蘭西の畫界で、一つ美しい風紀がある。それは師弟の間柄は、立派な區別があつて、師は弟子を愛し、弟子は何時迄も師を師として敬ふ。又長幼の別も明かで、後進が、たとひ技術に於いて優等であるからとて、先輩に對して、競争がましいともせず、まして不遜の態度を示すなどの事は斷じてない。それから同窓間でも、非常に睦じいもので、嫉妬、猜忌などの惡習は更に認めない、これは實に美しい風習で、我が邦なども是れに倣ふが宜しからうと思ひます。

◎話が横へそれたが、マア今回の博覽會の洋畫といふものは、忌憚なく言ふと、思つたよりは傑作が無いと申す外は無いのであります。

『太陽』九十四明治三六年四月』

明治三六年三月一日から七月三二日まで大阪にて開催された第五回内国勸業博覽會出品の洋画に対する評である。黒田

は同博覧会第十部(美術工芸)第二科(洋画)の鑑査員・審査官を正木直彦(主任)、久米桂一郎、松岡寿、浅井忠とともにつとめ、和田英作の《こだま》、岡田三郎助の《読書》が二等賞を受賞したが、本文献にもあるように洋画の出品は概して低調とされた。同博覧会の美術をめぐる状況については、丹尾安典「和田英作——世紀末のこだま」(早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』二昭和六〇年三月)、『日本美術院百年史』二卷下(平成二年二月四三六～四五九頁)を参照。